

15. ■大学図書館の学習支援

同志社大学 学習支援・教育開発センター

井上真琴

1. 教育から学習支援へ

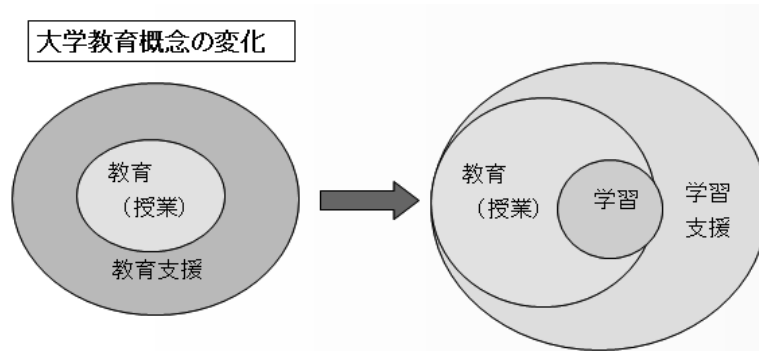
1.1 なぜ学習支援に参画するのか

日本の高等教育は「教育」から「学習支援」へとコンセプトの転換期を迎えている。

高度情報化社会・知識基盤社会においては、伝統的な授業形式である「知識の注入」よりも、学習者が自ら学び、創造性を開発するよう誘導する学習支援が重視されるようになってきた。

大学行政管理学会初代会長を務めた孫福弘氏は既に17年前、2010年の高等教育界を予測して、「教育すなわち学習の主役は学習者としての学生であり、教室での授業の役割は、主として学習者の問題意識の喚起と指導助言機能、ならびに必要なに応じた知的技法の付与におかれ、学習活動の中心部分は、キャンパスや街などの空間で学習者の主体的行為として営まれる」と論じている。

さらに「教員による良質の授業と同時に（中略）、学習者の主体的学習を効果的に支援する、組織化され制度化されたさまざまな仕組み、仕掛けがなくてはならないものになる。そしてこの過程では、従来の教育（授業）機能のある部分は、学習支援の装置の役割に移管されることになる」と喝破していたのである（下図参照）。



『大学改革 2010年への戦略』p.138 より転載

ここでは、学習を促すものとして「教育（＝授業）」と「学習支援」の機能が、対等な重要性をもって「学習」機能を取り囲むという構図が成り立つ。学習者の創造性を開発する教育では、「授業」も一種の学習支援に過ぎない。この認識構造が学習支援を考えるうえで重要な鍵となる。大学職員が、そして大学図書館員が、学習支援に身を投ずる根拠はこの点にあるとよい。

何より、学生の学習こそが最優先の課題であり、教員は授業（＝学習支援の材料）の提供、職員は学習支援サービスの提供を通じて、互いに学習を支援する重要なパートナーの機能を共有し、協働することが求められるのである。

1.2 新しい教育手法への注目

教育コンセプトの変容の背景には、高等教育のグローバル化の波が横たわっている。日本の高等教育も国際競争力に晒され、昨今では教育プログラムや卒業時能力の国際通用性をめぐって、「教育の質保証」が声高に叫ばれている理由はここにある。

グローバル化社会では、「何を教えたか、何を伝えたか」よりも、学生自身が教育プログラムを通じて「何を学び、何ができるようになったか」が問われる。つまり、学習成果：Learning Outcomes の重視である。また質保証に関連して、「単位の実質化」に向けていかに学生の「質の高い授業外学習」を担保するかも、最大級の課題である。

こうした課題群への対応は、教育手法の高度化と学習支援の仕掛けがなくては、全く語りえないと言えよう。

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（2008.3）においては、「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習などを取り入れる」ことが提言されており、教育が「知識の伝達」から「知識の創出・自主的学習」へと向かう潮流は明らかである。

さらに、同審議会・大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」（2012.3）、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2013.8.8）では、授業外学習を含む学修時間の質的転換と主体的な学びの支援が強調されている。

とはいえ、主体的・能動的な学びを引き出す手法や仕掛けは容易に普及するものではない。

アクティブ・ラーニング、PBL（Project/Problem Based Learning）、TBL（Team Based Learning）の手法を取り込み、実践するには、授業の設計・運営・評価の面で教員側にも相当な力量と負担を強いることになり、教育プログラムの運営に携わる大学職員・大学図書館員の教学マネジメントの力量も問われることになる。

大学教員の教育力の組織的向上を目指すFD（Faculty Development）の研修プログラムでは、この種の授業を実践するための職能開発コースが準備されている。内容は授業外学習を誘発する指導法、学生への課題の与え方、学生に「勉強させる」方法論が中心となっているが、これらは大学図書館の支援なしには実効性を持たないであろう。いまこそ大学図書館が教育改善や学習改善に貢献できること、学習支援で可能なことを積極的に主張すべき時であり、私たちはまたとない好機を迎えているのである。

1.3 学習支援サービスに向けて大学図書館員が学ぶべきこと

大学図書館はこの潮流に乗り、大胆な組織の再編と新しい学習支援サービス機能の開発を急がねばならない。現場からは学習支援サービスは既に十分実施しているとの反論があるかもしれないが、従来の情報リテラシー教育であれば、ガイダンス・講習会の実施、パスファインダー作成等に留まり、教員の授業補助にすぎないものが多く、学習支援の主役に躍り出るものではない。

大学図書館員は自学の教育内容やカリキュラムを分析することにより、学習者の学習プロセス全般に亘って直接アドバイスを行い、その学習成果の測定にも関与するなど、教室内外の学習支

援を強化するサービス体制を確立することを目標としなければならないのである。

この目標を達成するには、大学図書館員も教員と同様に「人はどう学ぶのか」という学習のメカニズムに関する知識や理論を体得する必要がある。というのも、欧米ではFD推進現場から教育力改善（＝学習支援力改善）には「図書館員を巻き込むべき」との意見が頻繁に発せられ、大学図書館界が唱導してきたラーニング・コモンズについても、FD関係者、高等教育研究者から熱い視線が注がれている。こうした期待に応え、大学図書館が情報リテラシー教育を主軸とする学習支援サービスを展開するためには、学習科学に基づいた教授法のノウハウを取り入れ、主体的な学びを促す教育手法を使えることが教員同様に求められ、そこで得られた知見が教員と協働する際の「共通言語」となるからである。

科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」（2010.12）が指摘する通り、学習支援を担当する図書館員は、大学図書館員としての専門性に加え、「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」が求められる。実のところ、それを体現しているのが欧米の Blended Librarian や Embedded Librarian なのである。

日本の大学図書館員の大きな弱点は、思考回路が情報源の提供や配信、情報流通の域に閉じていることにある。情報源へのアクセスを保証するだけでは、間接的な学習支援にしかならない。情報源の「ロジスティクス」主義を脱皮して、情報源を使って成果を出す「学習認知のメカニズム」を知ることが、学習支援を担う大学図書館員の責務といえよう。今後、情報を使った学びが人の認知をどう変えるかを意識できるかどうか。重要なのは情報源（コンテンツ）ではなく、それを利用して学ぶ文脈（コンテキスト）と行為であることを認識してほしい。

2. 学習支援とラーニング・コモンズ

2.1 学びを誘発する“仕掛け”空間

さて、大学図書館界に膾炙した観のあるラーニング・コモンズは、「知識が伝えられるだけの場」ではなく、学習者間の啓発、物理的な空間や教育ツール（備品）の相互作用を通じて、「知識を再構成し創造する場」を関連部局と協力して運営することを狙いとする。ラーニング・コモンズは、何かを学ぶだけでなく、目標に到達するにはどのように学べばよいかを（他者と協調して）学ぶ場、学習プロセスのマネジメントを含む「メタレベルの学び」「学びの身体技法」を獲得する学習環境にほかならない。

ここで留意すべきは、欧米のラーニング・コモンズは、実践の共同体理論、学習の状況論的アプローチ等の理論やコンセプトが表現されている空間であるということである。

ラーニング・コモンズの空間に一歩足を踏み入れると、グループワークを行う学生の様子が見て取れる。グループ学習室はガラス張りが多いが、透明でオープンな空間の利点は何か。それは学び方が「見える化」され、相互に触発される仕組みになっていることである。あるグループはコンセプトマップを白板に書いて、解決に向けて議論を行っている。他のグループは、ブレイン・ストーミング作業でひとつずつ問題を付箋紙に書きあげ、机の上に並べて分類作業をしている。

またあるグループは、グラフかマトリクスを電子黒板のディスプレイに映し出し、画面に書き込みを入れながら相談している。別の場所では、学生対象のワークショップが開催中で、通りがかりの学生が興味をもって何をしているのかと話に吸い寄せられていく。

あたかも創造現場の実況中継のように、学生やグループの活動が、リサーチの方法や作業プロセスが、相互に「見える化」されていることで、学生同士、教員と学生との双方向の反応が共有できれば連鎖の効果は大きい。決定的なのは、視認性と相互刺激性の高さによって、この空間に「思考過程の可視化と共有」が生まれている。つまり、学ぶ「行為」こそが、そこに集う人たちにとって重要な「情報源」なのであり、行為が情報源に化すのである。

この空間はまた、情報リテラシーを育む空間でもある。授業で紹介される参考ツールやデータベースという「道具」はすぐに使いこなせるものではない。レポートの執筆やゼミ発表の準備を行うプロセスのなかで情報探索を行ってこそ、使いこなす実践知が得られる。リサーチの現場でしか、プロセスの状況下でしか学べない知識がある。講義で教えられる学術知や専門知は、図書館によるチュータリングの人的支援（レファレンスや情報リテラシー教育）を受けながら、具体的な学びの文脈のなかで実践知に変換されるはずである。

日本国内でラーニング・コモンズを開設した大学の中には、教育と学習環境に関する認識不足から、運営の停滞を招いているところがある。「箱」は作った、だがどのように運営すれば効果的な学習成果が期待できるのか。この検討が後追いになっている場合がある。ともすれば、デザイン性豊かな什器備品を配したグループ学習室、お洒落なカフェの併設等に目を奪われがちであるが、教授法理論や学習科学の裏づけをもって設計・運営されなければ学習環境の効果は低い。日本のラーニング・コモンズの運営課題のひとつは、ここにあると言えよう。

2.2 運営に求められる力とは何か

ラーニング・コモンズの運営に求められる力とは何か。1.3 の再述となるが、特に人的サポートを担当するスタッフは、「人はどのように学ぶのか」の知見を得ることが不可避であろう。英国大学のFD担当者が繰り返し説くのは、「学生の学び方を理解してはじめて、教育方法を議論できる」ということである。つまり学習理論を知れば、どのような課題の出し方をすれば教育効果があがるのか、理解度を増す説明とは何かといった、良い学習成果を導く方法が分かると言う。

実際に私が学びのアトリエ空間と感じたものは、「認知的徒弟制」という学習理論で説明される。事実を学習する学校教育と違って、職人の親方と弟子たちが教え学び合うプロセス、技を盗むプロセスをモデルにした学習理論である。知識という道具を、実際の問題解決の場で使う親方や先輩の「考え方」（認知）を学ぶ点に焦点を当てた理論であり、実感を伴って理解できる。

また、プロの能力は「行為の中の省察」で磨かれると主張する「省察的实践」理論がある。情報リテラシー教育のプログラム開発に、「調べながら考え、考えながら調べる行為」とする視点を持ち込む重要性を教えてくれる。探索のさなかに「振り返り（リフレクション）」の習慣を身につければ、より文脈と状況に適った情報探索スキルの向上に繋がっていく。

単なる物理空間とお仕着せの学習支援サービスがあれば、ラーニング・コモンズが成り立つわけではない。学習支援を図書館が担いたいなら、無自覚な運営に陥りたくないなら、さらに教員

と対等に議論したいのなら、学習科学を意識して運営に携わっていく必要がある。

上記を理解した上で、今後最も困難な課題として挙げられるのは、ラーニング・コモンズにおけるチュータリング機能の実現、すなわち人的サポートの組織編制とスタッフ育成のマネジメントであろう。広範囲に亘る学習支援を展開するには、図書館のみで運営をまっとうするのは不可能である。関連組織（ライティング・センター、ITセンター、FDセンター等）との協力体制を築き、TA（Teaching Assistant）の有効活用や学生同士のピア・サポート活動を仕掛けるマネジメント能力が図書館側に欠如するならば、この種の空間は機能しない。さらに、関係スタッフの能力育成プログラムの開発（例えばTAD：Teaching Assistant Developmentプログラム）や、継続した実施体制の確立という事項も、付随して課題となってくることは間違いない。

3. 学習支援としての情報リテラシー教育

大学図書館での情報リテラシー教育の実践は、例えば初年次教育の隆盛と歩調を合せ、着実に蓄積が重ねられてきた。とはいえ、図書館ガイダンス、データベース検索講習会等のメニューを揃え、とにかく実践を積み重ねている段階に留まっており、学習効果や目標達成評価を測ることや、情報リテラシー教育プログラムの質やデザインを問うまでには至っていない。

『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』（2006年）による評価は、「現時点で、多くの大学で行われている（図書館の）情報リテラシー教育は教養教育及び各専門分野における教育との連携が不十分であり、効果が限定的である」としている。この指摘の背景には、利用者の学習行動の理解や教員の教育手法との接合に脆弱さがあり、図書館が「個別に」「単発に」開催する“局地戦”としての情報リテラシー教育にすぎないとの認識があるように思えてならない。

では何ができれば“局地戦”からの脱却が可能なのか。それは、講習参加者にアクティブ・ラーニングを促す手法を取り込んだプログラム、協調学習を埋め込んだプログラムを図書館員自らが開発し、教員と協働して実践できることであろう。つまり、学術情報がアクティブ・ラーニングに果たす役割を明示的に説明でき、具体的な事例をもって実践プログラムに落とし込む能力を得てはじめて、高等教育世界の“広域戦”に参加が可能になるということである。

3.1 学習傾向の把握と学習プロセス全体に亘る支援

では「組織的に」「計画的に」「体系的に」、かつ教授法や学生の学習方法と密接にリンクした情報リテラシー教育プログラムを実施するにはどうすればよいのだろうか。繰り返しになるが、それには大学図書館員による利用者の学び方、学習メカニズムの理解と把握がなければならない。

数年前、米国のワシントン大学の研究者が実施した調査報告：Project Information Literacy Progress Report (25大学・8353名の学生を対象にした情報活用に関するアンケート調査と分析)は実に興味深いものであった。この報告によれば、リサーチ活動を展開する上で学生が最も難しいと感じている事項として、1)初動調査を始めること(84%)、2)トピックの明確化(66%)、3)トピックの絞込み(62%)が上位を占めている。

日本でも同様の傾向が見てとれるが、情報源の入手方法というよりは、入手した情報源をじよ

うずに取り扱ってテーマを絞り出し、アウトプットを見据えながらフォーカスを形成していくプロセスに焦点をあてることが重要と言えよう。報告最終章の提言では、情報源紹介に焦点をあてた図書館員対象の研修は再考されるべきであり、むしろ学生のリサーチ戦略の組み立てや、探索時の思考の道筋を指導できる能力を開発すべきだと強調している。

もちろん、彼我の情報環境・教育環境は異なり、そのまま鵜呑みにはできない。しかし私たちも同様に、日本の学生の学習行動を注意深く観察しながら、表面的な学生のデマンドではなく、学習ニーズの文脈を汲み取ったプログラムを考案する必要がある。インターネット情報源が遍在し、利用者が容易に情報源を発見できる環境下では、「情報源の紹介・使い方」から「多様な情報を使ってどのように問題解決を行い、学習成果を出すか」という踏み込んだ情報リテラシー教育へと移行せざるをえない。情報を読み解き、問いを立て、新たな知識を創造する体験を支援する情報リテラシー教育プログラムの実践が求められるのである。

2013年、文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会 学術情報委員会で「学術情報をいかにアクティブ・ラーニングに有効に使うのか」との問いが投げかけられた。この問いを突き破るには、「多様な情報を使って問題設定と問題解決を行い、いかに学習成果を出すか」を、協調学習の手法を交えて実践する視点に立ったときに、はじめて見えてくるのであろう。

3.2 FD活動との接点を重視する意味

最後にFD活動との接点も忘れてはならない。

NII主催「学術情報リテラシー教育担当者研修会」の研修プログラムは、教員のFD研修で説明されている学習理論・教授法を紹介するコマが含まれるカリキュラム編成になり、講師の顔ぶれにはFD推進センターや教育開発センターの教員が並んでいる。ワークショップのコースデザインや実施方法、協調学習の理論やフレームを情報リテラシー教育に応用できるようになるには、従来の図書館の枠を超える領域まで学ばねばならないのである。

大学図書館員がこれらを自家薬籠中のものとし、学術情報源を使って実践指導できるようになり、実践での学習効果の測り方を学ぶことが、「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」の第一歩になるに違いない。

ぜひともFD活動に積極的に参加することで、教員と協力体制・信頼関係を築けるマネジメント能力・リエゾン能力をも開発し、教員と協働するなかから質の高い情報リテラシー教育プログラムを提案していく努力を続けてほしい。

情報リテラシー教育の議論は既に、情報源紹介・操作法解説のレベルを脱皮して教育プログラムと連携したアプローチへと離陸する時期に差しかかっている。「知識の伝達」よりも「知識を使う知識」を重視する高等教育の転換点にあって、各大学においてどのような情報リテラシー教育が有効なのか。

それを問うことは、大学図書館にとって永遠の、しかし喫緊の課題なのである。

《参考文献》

- ・孫福弘. “大学運営のリエンジニアリング.” 大学改革 2010 年への戦略. PHP 研究所. 1996, p. 127-153.
- ・中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)”. 文部科学省. 2008-3-25. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm, (参照 2014-06-10)
- ・中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて (答申)”. 文部科学省. 2008-12-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (参照 2014-06-10).
- ・中央教育審議会大学分科会大学教育部会. “予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ)”. 文部科学省. 2012-03-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm, (参照 2014-06-10)
- ・中央教育審議会大学分科会大学教育部会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)”. 文部科学省. 2012-08-08. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (参照 2014-06-10)
- ・科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について (審議のまとめ) : 変革する大学にあって求められる大学図書館像”. 文部科学省. 2010-12-01. <http://www.janul.jp/j/documents/mext/singi201012.pdf>, (参照 2014-06-10) .
- ・鎌田均. エンベディッド・ライブラリアン : 図書館サービスモデルの米国における動向. カレントアウェアネス. 2012, no.309, p.6-9.
- ・米澤誠. 研究文献レビュー 学習・教育基盤としての図書館動向レビュー. カレントアウェアネス. 2008, no.296, p.26-28.
- ・美馬のゆり, 山内祐平. 「未来の学び」をデザインする : 空間・活動・共同体. 東京大学出版会. 2005, 233p.
- ・山内祐平編. 学びの空間が大学を変える : ラーニングスタジオ/ラーニングコモンズ/コミュニケーションスペースの展開. ボイックス (株). 2010, 186p.
- ・加藤信哉・小山健司編訳. ラーニング・コモンズ : 大学図書館の新しいかたち. 勁草書房. 2012, 288p.
- ・米澤誠. 動向レビュー インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ: 大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- ・McMullen, S. US Academic Libraries : Today's Learning Commons Model. OECD. 2008. <http://www.oecd.org/dataoecd/24/56/40051347.pdf>, (参照 2014-06-10).
- ・特集, ラーニング・コモンズ. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, no.7. 70p.
- ・井上真琴. 特集, 学習環境としての大学図書館 : 「学びのマネジメント」を支援する. IDE.

2009, no.510, p.11-15.

- ・井上真琴. FD 活動との接点から図書館を視る：ラーニング・コモンズを例に. *Maruzen Library News*, 2009, no.7/8, p.12-13.
- ・筑波大学編. 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書：教育と情報の基盤としての図書館. 2007, p.113-122.
<http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/pdf/future-library.pdf>, (参照 2014-06-10).
- ・野末俊比古. 研究文献レビュー 情報リテラシー教育：図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向. *カレントアウェアネス*. 2009, no.302, p.18-24.
- ・Head, Alison J.; Eisenberg, Michael B. Truth Be Told: How College Students Evaluate and Use Information in the Digital Age. Project Information Literacy Progress Report. University of Washington's Information School, 1 Nov. 2010, 72p.
<http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED535166.pdf>, (参照 2014-06-10).
- ・学術情報委員会. 文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/index.htm, (参照 2014-06-10).
- ・井上真琴. 特別企画, 新しい学びを支援する大学図書館：大学の教育力を高める図書館の新しい役割. *Between*. 2012, no.6/7, p.26-27.
- ・井上真琴. ラーニング・コモンズは大学図書館を変える. *私学経営*. 2013, no.460, p.30-36.
- ・井上真琴. 特集, ラーニング・コモンズ：ラーニング・コモンズの理念と目的を探して. *IDE*. 2013, no.556, p.17-22.

大学図書館の学習支援

同志社大学 学習支援・教育開発センター事務長
社会学部嘱託講師「学術情報利用教育論」

井上 真琴

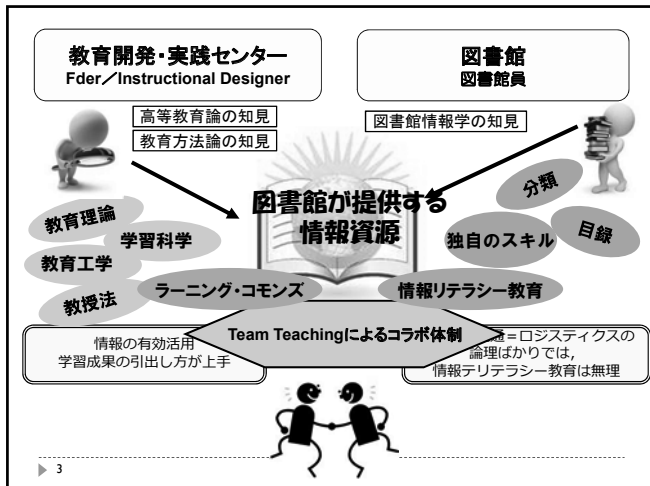
minoue@mail.doshisha.ac.jp

▶ 1

本日のまとめ

1. 高等教育改革の文脈のなかで、大学図書館の学習支援・学習環境を捉える。
※授業改善、授業外学習の質の保証《教職協働》
2. 「人はどう学ぶのか」=学習理論に立脚した学習支援プログラムを企画・立案する。
※学習科学や教育工学との接点《連携の共通言語》
3. 情報源サービスから「情報源を使った学びの体験」サービスへの転換を理解する。
《アクティブ・ラーニング型情報リテラシー教育》

▶ 2



▶ 3

◎ 科学技術・学術審議会 学術分科会
研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会

「大学図書館の整備について」(審議のまとめ)
—変革する大学にあって求められる大学図書館像—

2010年12月3日

1. 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置付け
(3) 大学図書館に求められる機能・役割
① 学習支援及び教育活動への直接の関与
2. 大学図書館職員の育成・確保
(2) 大学図書館員に求められる資質・能力等
① 大学図書館職員としての専門性
② 学習支援における専門性
③ 教育への関与における専門性
④ 研究支援における専門性

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
(参照2014-06-19)

▶ 4

I. 教育から学習支援へ

教育から学習支援へ

教育コンセプトの転換
「知識の伝授」(授業)

Professor = Profess《告白》する人 ×



学習者自らの「創造性開発」(学習支援)

※教育(=授業)と学習支援が対等な関係

高等教育のグローバル化・国際通用性(教育の質保証)
Learning Outcomes重視:「~ができるようになる」

▶ 5

I. 教育から学習支援へ

新しい教育手法の推奨

学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法(アクティブ・ラーニング)を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習、PBL (Problem/Project Based Learning)などを取り入れる。大学の実情に応じ、社会奉仕体験活動、サービス・ラーニング、フィールドワーク、インターンシップ、海外体験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施する。学外の体験活動についても、教育の質を確保するよう、大学の責任の下で実施する。

中教審「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」(2008)

▶ 6

I. 教育から学習支援へ

アクティブ・ラーニングが言語化できない

- ▶ アクティブであるべきなのは、学生の行動 (Behavior) ではなく、認知 (Cognition) であり、学生の「認知的な」姿勢をアクティブにすることが重要 (メールマガジン「Beating」第58号)
- ▶ 学習は、学習者の能動的探索による知識構造体 (スキーマ) の組み替えであり、その過程のコミュニケーション行為により、知識が社会的に構成されることを重視
- ▶ コミュニケーションの文脈デザインと知識再構成過程への関与により学習支援が可能

形態・呼称: 課題探求型学習, PBL (Project-, Problem-Based Learning), 学生参加型授業その他
 理論・手法: アンカード・インストラクション, 相互教授法, ジグソーメソッド, ゴールベースシナリオ, LTD等

▶ 7

I. 教育から学習支援へ

ラーニング・コモンズ設置の説明スキーム

1. 高等教育は、学習成果 (アウトカムズ) 重視に移行している。シラバスに「〇〇ができるようになる」と記述する根拠になっている。
2. 学習成果の向上には、アクティブ・ラーニング (グループでの議論や体験の重視、ピア・サポート) が有効だと審議会答申等で言及されている。
3. アクティブ・ラーニングは、複数人数で協同して行うと効果的である。主体的な学習者は、他者との相互作用を通じて学ぶことができる。
4. 協同学習に適した学習環境は、教室でいえばラーニング・スタジオ、教室外ではラーニング・コモンズになる。
5. ラーニング・コモンズの学習空間を活用すれば、授業外学習時間の増加、チュータリングによる学習の質向上が見込め、単位制度の実質化につながる。
6. 正課の授業外学習支援に焦点をあてるならば、その理由から運営組織は図書館ではなく、教学部門の組織が適切である。

▶ 8

I. 学習支援とラーニング・コモンズ

目的をどこにおくか

- ▶ 正課の授業外学習の担保と質転換
- ▶ アクティブ・ラーニングを通じて
 学びの身体技法を覚える共有空間
 (社会構成主義の学習観を反映した物理空間)



教室棟に開設したのは、学びが図書館という限定された世界に閉じこもることなく、より広い文脈のなかで、学生が「学び方を学ぶ」ことを体得する場として位置づけた (PBL教育, 初年次教育の蓄積)

▶ 9

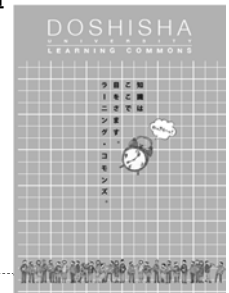
I. 学習支援とラーニング・コモンズ

同志社大学ラーニング・コモンズの概要 (1)

2013年4月
 文系学部の新出川校地統合に伴い設立された新校舎「良心館」
 (地下2階,地上5階,建築面積約8,000㎡,延床面積約40,000㎡)
 その2F・3Fにラーニング・コモンズを設置

パンフレット→
 日本語版
 英語版
 中国語版
 韓国語版

知的欲 望 開発空間



▶ 10

I. 学習支援とラーニング・コモンズ

同志社大学ラーニング・コモンズの概要 (2)

- ▶ コモンズの面積 2,550㎡ (日本最大級)
- ▶ 図書館とは別校舎: 教室棟の中心部
- ▶ 2フロアで構成 (フロア相互の共鳴)
 - 2F: クリエイティブ・コモンズ: 学びの交流・啓発空間
「学びのコミュニティ」の創出
 - 3F: リサーチ・コモンズ: アカデミックスキル育成空間
チュータリング機能
約650席 (950席まで拡張可能), PC約150 (ノート型は80) 台,
プロジェクター, ワイドスクリーン, プラズマモニター, 電子黒板,
HDカメラ, 録画・編集機器, マイク, スピーカー, TV会議設備等

▶ 運営主体は学習支援・教育開発センター

▶ ホームページ <https://ryoshinkan-1c.doshisha.ac.jp>

▶ 11

I. 学習支援とラーニング・コモンズ

同志社大学ラーニング・コモンズの概要 (3)

- ▶ 柔軟性 (Flexibility):
可変性のある空間, 組合わせの型の机, 持ち運び可能なホワイトボードほか
- ▶ 快適性 (Comfort):
長時間滞在が可能な空間
- ▶ 感覚刺激性 (Sensory Stimulation):
壁がなく, 死角もない, 視認性の高いオープンスペース:
他者の学習行動が「情報」になる空間

▶ 人的支援提供 (Technology & Skill Support):
PCサポート, 学習スキルサポート, 情報探索サポートほか
ワークショップ開催ほか

▶ 12

I. 学習支援とラーニング・commons

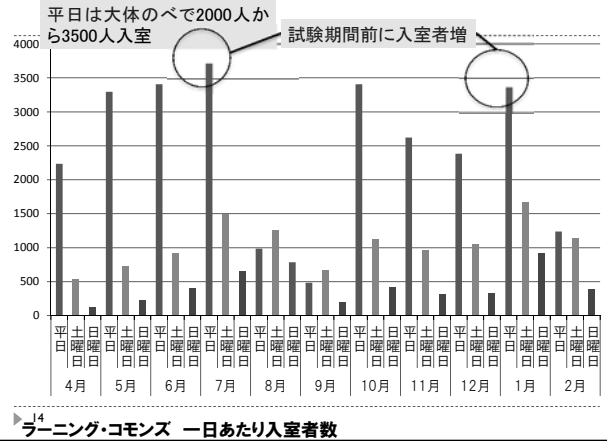
同志社大学ラーニング・commonsの概要 (4)

学習支援のための人的資源の配置

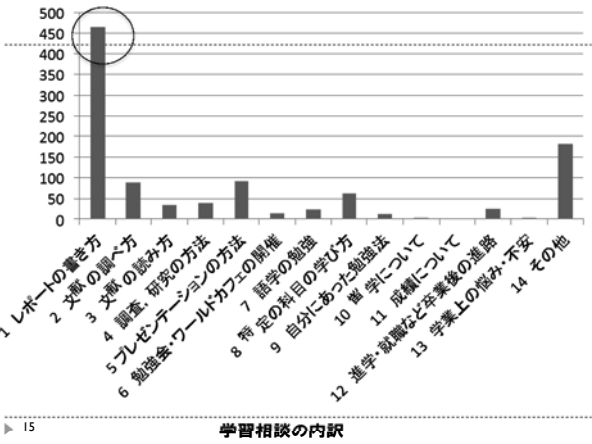
- ▶ アカデミック・インストラクター(専属教員3名)
- ▶ 学習支援コーディネーター(職員1名)
- ▶ 学習支援アシスタント(学部学生数名)
- ▶ ラーニング・アシスタント(大学院生14名)
- ▶ 情報探索アシスタント(図書館から1名)
- ▶ 留学コーディネーター(国際センターから職員1名)
- ▶ 留学アシスタント(国際センターから留学経験者数名)
- ▶ ICTサポートスタッフ(ITサポートオフィスから専門家・学生数名)
- ▶ プリントステーション・スタッフ(業務委託2名)
- ▶ 受付カウンター(業務委託4名)



I. 学習支援とラーニング・commons



I. 学習支援とラーニング・commons



I. 学習支援とラーニング・commons

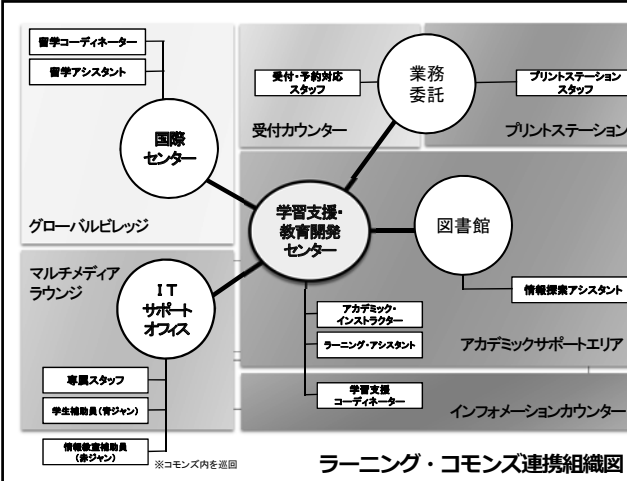
2014年度春学期アカデミックスキルセミナー概要

№	テーマ名	概要	開催日時
1	学術文献の読み方	自らの課題、テーマを念頭に、どう文献を読み進めればよいのかをミニレクチャーと実習を通して学ぶ。	6/27(金)14講義(今) 7/8(火)4講義(田) 7/18(金)13講義(田)
2	アイデアの拡張法	マインドマップと検索エンジンを使い、レポート・論文作成に役立つアイデア出しの方法を学ぶ。	6/19(木)14講義(今) 7/8(火)3講義(今) 7/11(金)14講義(田)
3	伝わる文章の書き方	どうすれば伝わる文章が書けるか、ミニレクチャーと実習を通して学ぶ。	6/16(月)14講義(今) 7/4(金)4講義(今) 7/25(金)13講義(田)
4	プレゼンの構成法	伝わるプレゼンの作り方・話し方等、事例を元にして学ぶ。	5/14(水)13講義(今) 5/20(火)13講義(田) 5/22(木)13講義(今) 5/27(水)13講義(今) 5/28(水)13講義(田)
5	グループでのアイデア出し	グループで多くのアイデアを出す方法、またそれらの絞り方について学ぶ。	7/2(水)4講義(今) 7/17(木)14講義(今)
6	ソーシャルメディアの学術的利用法	SNSなどのツールを用いてウェブ上の情報を半自動的に収集する方法を学ぶ。	6/20(金)13講義(田) 6/26(木)14講義(今) 7/14(月)13講義(今)
7	レポートの構成の立て方	レポートの構成の立て方を、ミニレクチャーと実習を通して学ぶ。	6/5(水)4講義(今) 7/14(月)14講義(今) 8/11(金)13講義(田)
8	ノートの取り方	聞きながら取る、読みながら取る。マインドマップを使ったノートの取り方、まとめ方を学ぶ。	6/4(水)3講義(今) 6/17(火)14講義(今) 6/27(金)13講義(田) 8/11(金)13講義(田)
9	ポスターの作り方	身近なツールを利用し、ポスター発表等が必要となるコツや技をサンプルを交えて学ぶ。	7/9(水)4講義(今) 8/8(金)4講義(田)
10	レジュメの作り方	授業やゼミの発表に欠かせないレジュメ、レジュメ作成のポイント、ミニレクチャーと実習を通して学ぶ。	5/30(金)14講義(今) 6/19(木)14講義(今) 6/27(金)13講義(田) 6/17(火)13講義(今)
11	引用の方法	なぜ引用するのか、どのような引用形式があるのか、レポート・論文作成に欠かせないルールについて学ぶ。	6/11(水)13講義(今) 7/4(金)13講義(田) 7/15(火)14講義(今)

I. 学習支援とラーニング・commons

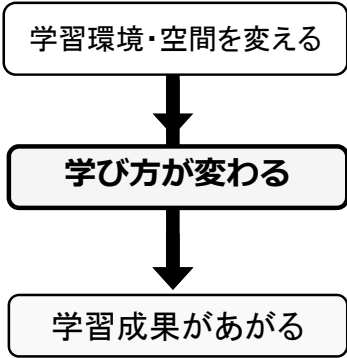
ラーニング・アシスタント(大学院生対象) ワークショップ

- 【到達目標】
- ・初対面の人でも、なごやかに話ができて、コミュニケーションをとる中で、相手の立場に立って考えることができる。
 - ・アカデミックサポートエリアに相談に来る学生の声を引き出すことができる。
 - ・相談に来る学生の勉強の仕方、履修科目、演習などの情報を基に、学部の履修要領とカリキュラム体系を念頭に、学生の状況にあった指導ができる。
 - ・大学の学びに必要なスキル・モラルについて説明できる。
- 【構成】
- 第1回 ラーニング・commonsとは
聞き手に求められるカーオーディエンス教育
 - 第2回 妥協点を見つけるために受容的に聴くカー傾聴法
 - 第3回 相手の立場に立って話をするカー自己尊重コミュニケーション
 - 第4回 各学部のカリキュラムと履修科目を知る
 - 第5回 大学での勉強とは？勉強法についての知識をアップ
 - 第6回 模擬アドバイジング練習
 - 第7回 学生のタイプに基づく授業形態へのアドバイス
 - 第8回 協同学習のアプローチ
 - 第9回 アクティブ・ラーニング、学生主体型授業
 - 第10回 特別ワークショップ 協同学習の理論と実践



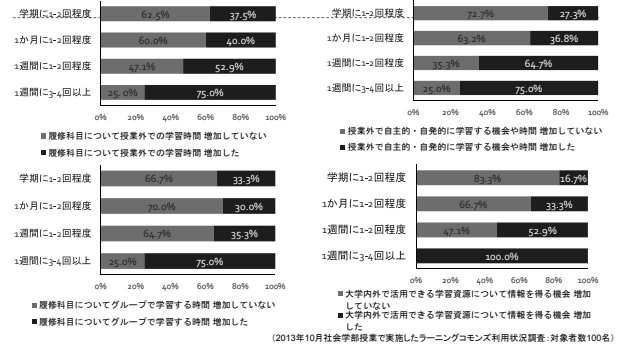
I. 学習支援とラーニング・コモンズ

学習環境・空間の議論で忘れがちな事項



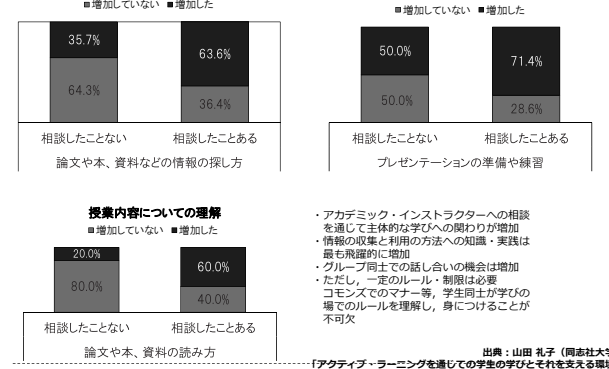
良心館ラーニング・コモンズ利用者アンケート結果（社会学部生対象）

ラーニング・コモンズ利用頻度と利用後の主体的な学びの変化



良心館ラーニング・コモンズ利用者アンケート結果（社会学部生対象）

相談と利用後の学びの変化



I. 学習支援としての情報リテラシー教育

図書館の考える「学習支援」の限界

- ▶ 教育理論・学習科学が教職協働の共通言語
- ▶ 図書館での情報リテラシー教育の弱点
=「情報を使って、学習成果(アウトカムズ)を出すプロセス全体を指導するサービス」になっていない。

◎アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた情報リテラシー教育プログラムの開発が焦点

I. 学習支援としての情報リテラシー教育

学習（学ぶ）とは何か

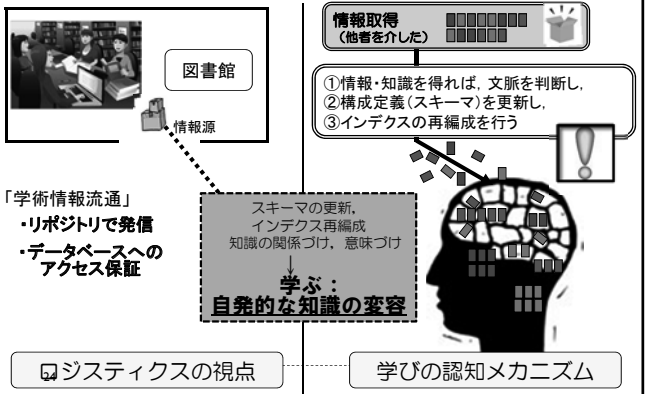
- ▶ 日々得る情報(モノからヒトから)を批判的に摂取し、新しい知識を創るために、頭の中の思考のスキーマ、インデックスを更新し、知識を再定義・再構成するプロセスそのもの。

Fabulous!!

エルゼビアサイエンス ライブラリ・コネクトセミナー
「情報リテラシー教育」(2009. 12, 大阪会場)

I. 学習支援としての情報リテラシー教育

ロジスティクスでなく認知メカニズムが焦点



学術情報とアクティブ・ラーニングの関係

- ▶ 学術情報委員会(2013年科学技術・学術審議会, 学術分科会)
「学術情報がアクティブ・ラーニングに果たす役割を
明確にしてほしい」

従来:モノ(情報)があつて,配信する【モノ重視】

今後:行動に向けて,モノ(情報)で人の「認知」を変える【コト重視】

海外調査活動でのヒアリング

ウーリック大学, レスター大学, グラスゴーカレドニアン大学他訪問)

【英国大学PGCHEプログラム】

行動主義, 構成主義, 社会構成主義
認知科学, 学習科学, 教育学の理論

※図書館員も参加して学習

“学習が先, 学びのメカニズム(理論)をまず押さえてから, 教育を考える”

▶ 25

アクティブ・ラーニングの手法を 情報リテラシー教育に取り込めるか

2000年~2005年頃のALAの議論
情報リテラシー教育をアクティブ・ラーニングで,
展開できるかどうか。



何が必要なのか？

▶ 26

Blended Librarian, Embedded Librarianに学ぶ

▶ Blended Librarian :

図書館スキルをIT技術, 授業設計技術, 教育学等と結びつ
けて大学の教育現場で活躍する図書館員

The Blended Librarian.

<http://crlin.acrl.org/content/65/7/372.full.pdf> (参照 2014-06-19)

▶ Embedded Librarian:

図書館を離れ, 利用者が活動している場から, 利用者と活動を
ともしつつ情報サービスを提供している図書館員。
ワークショップのような実践的な情報リテラシー教育が実行でき,
情報の特徴や信頼性を批判的に評価することを, 学生のリサー
チプロセスの全領域に関わって指導する。

鎌田均. エンベディッド・ライブラリアン: 図書館サービスモデルの米国における
動向. カレントアウェアネス. 2011, no.309, p6-9.

▶ 27

学習科学・学習理論を理解するために

連載 5分でわかる学習理論講座(全11回). Beating(メール
マガジン). 2005, no.11 - 2006, no.22.

<http://www.beatiii.jp/beating/index.html> (参照 2014-06-19)

※連載内で紹介されている文献すべて

今井むつみ, 野島久雄. 人が学ぶということ: 認知学習論からの
視点. 北樹出版, 2003, 247p.

中原淳, 金井壽宏. リフレクティブ・マネージャー: 一流は
常に内省する. 光文社. 2009, 347p.

▶ 28